210周年を迎えた恋愛小説

特集

『高慢と偏見』を読み解く

『高慢と偏見（原題：*Pride and Prejudice*）』というタイトルに聞き覚えはあっても、原書は読んだことがないという方も多いかもしれません。肖像画がイギリスの紙幣に描かれるほど国民的な小説家であるジェイン・オースティンの代表作で、実は映画『ブリジット・ジョーンズの日記』の元ネタになったことでも有名です。

初版から210年たった今もなお世界中で愛されている至極の恋愛小説を、原文で味わってみませんか？

解説執筆：廣野由美子（京都大学教授）
イラスト：Natsko Seki（p.31、p.34、p.42）
編集：栄谷真菜

『高慢と偏見』とは

本作は今も根強い人気を誇るイギリスの恋愛小説です。例えば現在Netflixは、本作をベースにして現代の恋愛模様を描く映画*The Netherfield Girls*の制作を予定しています。恋愛や結婚にまつわる悩みや誤解によるすれ違いといったテーマは、今の時代にも通じる普遍的なものですが、本作は200年以上前のイギリスを舞台とした物語なので、背景知識を理解してから読み始めましょう。

作者について

ジェイン・オースティン（1775–1817）は、イングランド南部のハンプシャー州で、牧師の娘として生まれた。二度ばかりの淡い恋愛の経験を経て、26歳のとき、知り合いの男性からの求婚を断り、生涯独身を通した。父の死後、30代前半より、母と姉とともにチョートン村のコテージ（現在のジェイン・オースティン記念博物館）へ移り住み、創作活動に没頭。『分別と多感』や『高慢と偏見』をはじめ、女性の生き方や結婚をテーマにした数々の作品を匿名で発表し、人気作家となった。病気療養のためウィンチェスターに引っ越し、41歳で死去。

鋭い観察眼によって人間の性格や人間関係を見事に描いたオースティンは、18世紀に誕生してまだ間もなかった「小説」を、豊かな文学形式として完成させ、小説の黄金期である19世紀へと受け渡した重要な作家として、英文学史上に位置づけられている。オースティンの小説は、世界各国で翻訳されて読み継がれ、次々と映画化されるなど、現代でも不動の人気を誇っている。

時代背景

物語の舞台である19世紀のイギリスは、上流階級・中産階級・下層階級より構成されたピラミッド型の社会だった。頂点を成す上流が、働く必要のない地主階級であったのに対し、底辺の下層は、使用人や農業労働者、産業革命以来急増していた工業労働者など、肉体労働に従事する人々から構成されていた。その間に挟まれた中流は、生活するために働かなければならない知識階級の人々——具体的には、牧師・軍人・弁護士・医者・実業家などの職業に従事する階層だった。女性は結婚して主婦になることが最も望ましいとされた当時、中流階級の女性が辛うじて品位を保つことのできる職と言えば、女家庭教師（governess）ぐらいしかなかった。「結婚」は家柄と財産という利害が絡むことにより、社会的上昇・下降をもたらす点で、人生を左右する重大な要素だったのである。中産階級から生まれてきた「小説」は、そうした社会的流動のなかで生じる人間の俗物性や葛藤を描くうえで、格好のジャンルだったと言える。